女囚

A Story by Golfer1　translated by Gembu

監視員と呼ばれるこのアリーナの責任者は、闘技場が一望できるＶＩＰルームの中でこれから始まるショーに胸を躍らせていた。このアリーナはある刑務所の地下に設立されている。この刑務所に収容されているのは死刑宣告を受けた女囚人ばかりだ。

一般にはもちろんマスコミにも伏せられている。伏せられている、と言うより知られてはならない。ここは刑務所本来の役割を果たす為に立てられたのではない、ある一握りの人間の快楽の為に立てられた闘技場と言うのが本来の姿であり、その隠れ蓑として刑務所を利用しているに過ぎなかった。

監視員は対外的には刑務所長と呼ばれ、普段は看守と呼ばれる男たちはアリーナでは兵士と呼ばれる。女囚刑務所の看守が全て屈強な男という不自然さは、脱獄者を防ぐための高い塀が隠している。そして、週に一度訪れる選ばれた階級の人間、ゆがんだ人間の、獣の欲望を満たす為だけに収容されている罪を犯した女達。それが、この刑務所の正体であり、すべてであった。

だが、罪深い女達にとっても悪い事ばかりではない。この刑務所は他に比べれば待遇は格段に良く、しかも、もし、闘技場での戦いに勝利することができれば、まったく別の人間として、外の世界で暮らすことができるのだ。死刑宣告を受けた彼女たちにしてみれば、最後のチャンスでもあった。前任の監視員が彼女達を必死にさせ、よりショーを面白くする為に考えたらしい。

今まで誰一人として、監視員の兵士に勝利したものは無く、当然無罪放免された者はいない。それでも彼女達は再び自由を得るために、自分の人生をもう一度やり直すため、日のあたる事の無い地下闘技場で戦っていた。

アリーナの観客席はU字形になっている。女囚達の席とその反対側に兵士達の席。その間、ちょうどUのカーブする部分にあたる席が、選ばれし人間の為の席と大きく3つに分けられている。それぞれの席は天井まである高い壁で区切られ、行き来することはできない。監視員のいるＶＩＰルームは選ばれし者の席の正面、U字の開いている部分あたる。

ここからはアリーナも全ての観客席も見渡すことができる。監視者だけに許された特別席だ。

アリーナは、高い観客席の壁に覆われ、出入り口は2つだけ。それぞれ、兵士と女囚の出入りする鉄の扉。そして、アリーナの床は黄色い土に覆われている。

今、そのアリーナの中央には二人の人間が向き合っていた。これから試合が始められるのだ。

一人は彼の兵士。そしてもう一方は当然女囚だ。兵士には黒いレザーのトランクスが与えられるが、女囚は一糸まとわぬ姿で戦うことが義務付けられている。もちろん、選ばれし者達へのサービスだ。

女囚の名はあすか。不幸な女であった。最初の夫は結婚すると同時に彼女に暴力を振るうようになった。ある日、たまりかねた彼女が夫を突き倒した。

反撃など予想もしていなかった彼はあっさりと倒れ、倒れた拍子にテーブルの角に頭をぶつけ死んでしまった。この件は彼女の正当防衛が成立し、罪に問われることも無かった。

だが、次に結婚した男も彼女に暴力を振るうようになり、思い余った彼女は彼を刺し殺してしまう。

血だらけの夫を見下ろし、今度は正当防衛にならないであろうことは、興奮した彼女の頭でも、容易に想像できた。彼女はコンビニのＡＴＭで全財産を下ろすと、まだ薄暗い夜明け前の街を逃げ出した。

比較的新しいマンションでほとんど住人同士の交流が無かった為か、事件が発覚したのは一週間後だった。電話してもまったく通じないのを怪しんだ、夫の会社からの通報により、事件はあかるみに出る事になったのだ。その頃、彼女は既に遠くの町にいた。

警察の影に脅えつつも、半年もする頃には、パート先で知り合った男と同棲するようになっていた。彼女に暴力をふるう事はなかったが、結婚を拒み続ける彼女に業を煮やした彼は、激しく彼女に詰め寄った。

決して彼は彼女に手を上げる事はしなかったが、彼女の目には過去の男たちの幻影と彼がかさ

なり、彼女はパニックに陥った。そして、気が付いた時には血まみれの彼と血まみれの包丁を握る彼女が立っていた。

放心状態のまま立ち尽くす彼女は、同じアパートの住人の通報で駆けつけた警官に逮捕され、運の悪いことに、まるで役に立たない国選弁護士にあたり、正当防衛であった最初の事件さえ、あたかも彼女の計画殺人であるかのように追及された挙句、彼女はこの刑務所にやってくることになったのだ。

「この男に勝てば、自由になれる・・・」

だが、その男を覆う見事な筋肉は彼女の一縷の望みを無残にも打ち砕く。自由だった頃にＴＶで見た格闘家と呼ばれる男達と同じ身体をしていた。

そして、汗で湿ったレザーのトランクスは筋肉とは違った男を誇示している。このアリーナで勝利した兵士は、相手の女を気の済むまで犯すことが出来る。この男はすでに彼女をどう犯すか思案しているようだ。

結婚暦はあるとはいえ、子供を生んだことの無い彼女のプロポーションは崩れてはいかった。むしろ、刑務所内での労働のせいで、適度な筋肉がつき、美しく、しなやかなプロポーションを作っていた。適度に重量感のある胸、それでいて張りがあり、垂れること無く乳首は軽く上を向いている。みぞおちの下辺りから、臍まで浅い縦線一本が延び、艶やかな白い下腹に濃い目の陰

毛。ヒップも適度に脂肪をのせながらも、引き締まっている。男が欲情するのも無理は無かった。

「誰かに似ている・・・」

対戦相手の男を見て彼女は思った。本来なら、そんな悠長な事を言っていられる状況ではないのだが、諦めが逆に彼女を、落ち着かせているのかもしれない。

短く刈り込んだ頭に、日に焼けた肌。細い目にくっきりとした眉。なんとなく、猿を連想させる顔だ。

「そうだ・・・」

何とか元気、と言う格闘家に似ている。確か、素早い動きと、トリッキーな動きでリングの上で踊るように戦っていた姿が印象に残っている。体つきも良く似ているようだ。

力でも素早さでも勝ち目はありそうに無い。

「あれに・・・」貫かれるのだ、というあきらめの目で男の股間をぼんやりと見ていた。

ぴったりとフィットした、レザーのトランクスの上からでも、彼の物ははっきりと確認できた。全体的なサイズとしては、けして大きくは無いが、しっかりとエラが張り、まっすぐに上を向いている。その下には、なかなか大ぶりの二つの睾丸があった。

「・・・もし・・・もし、あの玉に一撃を当てられれば、勝てるかもしれない・・・？！」

彼女は一筋の光を男の睾丸に見た。

簡単なことではないが、男の油断に付け込めば何とかなるかもしれない。
彼女は思い出した。彼女には後が無いのだ、これが最後の生きるチャンスだという事に。
地獄に下ろされた一本の蜘蛛の糸。
彼女にとっては、今まさにこの男の睾丸が、己の命をつなぐ蜘蛛の糸なのだ。
小説の蜘蛛の糸は途中で切れてしまったが、最後の希望である事に変わりは無い。

彼女は出来るだけおびえた顔をして見せた。両手で胸を隠し、軽く右の腿を上にして股間を隠すようにしながら、男が不用意に近づいてくるのを待った。
案の定、男は今までの女囚がそうであったように、反撃してくるとは思っていないようだ。いやらしい笑みを浮かべながら、ゆっくりと彼女に近づいてくる。
彼女は飛び出しそうな心臓の高鳴りを聞きながら、あせる気持ちを抑え、じっと力をためる。やがて、男は両手で彼女の方をがっしりと掴んだ。

男の顔が目の前にあった。やはり、何とか元気に似ている、頭の隅のそんな事を考えながら、彼女はうつむいた。男の睾丸の位置を確認するためだ。
彼女の目に男の睾丸の膨らみがはっきりと見えた。男の動きに合わせて窮屈そうにトランクス

の中を、ゴリゴリと動いている。男の動きが止まった。
彼女は男の股間を、渾身の力を込めた右膝で突き上げた。
タイトなトランクスは、男の睾丸に逃げ場を与えなかった。
彼女は、自分の膝ではっきりと、コリコリとした、押し潰される２つの玉を感じた。

雷に打たれたように男は硬直した。目を大きく見開き、口を酸欠の金魚のようにパクパクとさせている。
「はっ・・・・っひっ・・・・っはひっ・・・っ！？」
息が詰まるほどの衝撃が、股間から彼の全身を走った。
女の両肩を掴んでいた手で、己の股間を守るように覆った。
この女が、自分の股間を蹴り上げたことは、理解したが、苦痛が和らぐわけではない。
今、彼の筋肉は、突然の衝撃に耐えるだけで精一杯で、反撃する余裕などは無かった。
彼の脳は反撃の二文字よりも、今全身を支配している、男としての最大の苦痛から、どう逃れるかで手一杯であった。軽い過呼吸が、パニック状態に拍車を掛けていた。
彼女の一撃は男から全ての強さを奪っていた。
両手で股間を覆ったまま、膝を閉じ、前のめりになる。目には涙が滲んでいる。
そのまま、男はゆっくりと黄色い砂の上に膝をついた。全身は汗で濡れ、光っている。

男がやっとの事で顔を上げた。さっきまで脅えていたはずの女が彼を見下ろしていた。彼は全身が怒りで真っ赤になるのを感じた。
「思い知らせてやる」
痛みが若干和らいできた彼の頭は、今この女に対する復讐で一杯だった。
「俺のキンタマの痛みは・・・何十倍にして返してやる・・・」
男の顔は真っ赤に上気し、目は狂気をはらんでギラギラと輝いていた。やがて、男はゆっくりと立ち上がると、一転、驚くようなスピードで女を捕らえた。
ダッシュをかけた時に睾丸に激しい痛みが走り、一瞬崩れ落ちそうになったが、うまく女を捕らえる事が出来た。女の胸の辺りで彼女の腕ごと、がっしりと両腕を回して締め上げる。ベアーハッグだ。そのまま軽く仰け反る様にして、女を持ち上げる。彼の目の前で女は苦しそうに喘いでいる。だが、彼の怒りはまだ収まらなかった。
「このまま肋骨をへし折ってやるぜ・・・」
さらに腕に力を込めた。

「殺される・・・」
呼吸もままならなくなった彼女は死を覚悟した。

だが、自分の胸と男の胸に挟まれた両腕の手の甲が、男の股間に当たっている事に彼女は気づいた。
「あぁ、神様・・・。」
彼女最後の力を振りり、男の腕に絞り上げられつつも、細く華奢な両腕を反転させた。
何とか反転させた右の手のひらに、男の睾丸の感触を見つけた。
彼女の頭に再び、蜘蛛の糸が天から舞い降りた。

「バラバラにしてやるぜっ！」
とどめを刺そうと、両腕に更に力を込めようとした時、彼は再び股間に激しい痛みを感じた。
「うっぎゃあぁぁぁっっっっ！！」
彼女の右手には男の左の睾丸が、左手には右の睾丸がしっかりと握られていた。
それは、何とか逃げ出そうとするかのように、彼女の手の中でコリコリと微かに動いた。
「はっ、はなせぇぇぇっ！！」
ベアーハッグどころではなくなった男は、さっきまで女を締め上げていた両手を解き、彼の睾丸を握る、女の手を解こうとした。
女が更に力を込める。
「ひぃっっ！！」

女の手首を掴むのが精一杯だった。
しかし、手首を掴んだところで、どうにもならない。
睾丸を握られた彼は、無力だった。
「はひっ、き、キンタマが・・・」

彼女の目の前で、男は急速に力を失っていく。
顔は青ざめ、情けない声を出しながら、口をパクパクさせている。
彼女の手首を掴んでいる手には、まったく力が感じられなかった。
彼女は、左手で男の睾丸を握ったまま、右手を離した。
彼女の右手首を掴んでいる、男の手を、あっさり振り払うと自由になった右手で、トランクスの左裾から中へと無理やり手を差し込み、男の睾丸を直に掴んだ。
掴んだ感触では、袋にはほとんど、毛は生えていないようだ。
左手を放した彼女は、トランクスの中で、親指と人差し指で輪を作り、玉袋の根元を、絞り上げるように掴み直した。そして、そのまま裾から男の睾丸を引っ張り出す。
男は、かなり大きい睾丸を持っていた。褐色で、引っ張られている為かつやつやとしている。やはり、玉袋にはあまり毛は生えていないようだ。
いったん放した左手で、下から掬うように男の睾丸を叩いた。

ピシャッ！
「はうっっ！」

彼女は、男の睾丸を掴んだまま、観客席に手を降りながら、アリーナをゆっくりと一周した。
まるで、犬でも散歩させるように。
睾丸をつかまれたままの男は、苦悶の表情のまま、付いて行くしかなかった。
女囚席と選ばれし者の席は、異様な興奮に包まれ、逆に兵士席は、水を打ったように静まり返り、中にはまるで、自分の事のように股間を押さえている者もいた。
彼女は、再びアリーナの中央に戻ると男に向き直った。
青ざめた顔は汗で濡れている。口は半開きのまま喘ぎ、見事に割れた腹筋は、激しく上下している。逞しい両腕は、今は力なく垂れ下がり、膝は今にも崩れそうなほど小刻みに震えている。立っているのがやっとのようだ。
彼女は掴んだままの男の睾丸を見た。
不思議な物だ。普段は男の証のように言われているくせに、掴まれると、情けない声で悲鳴をあげる事しか出来なくなる。
「たっ、頼む・・・もっ、もう、もう、放して・・くれ・・・」
「放すって何を?」

彼女は意地悪く聞いた。
「きっ、キンタマ・・・キンタマを・・・」
「誰の？」
「俺の・・おっ、俺の・・キンタマ・・・です・・・」
男の目は焦点があっていない。
「そうね。そろそろ飽きたし、放してあげるわ」
そう言うと彼女は、男の睾丸を解放した。　睾丸は男の股間で重そうにぶら下がった。
男が、安堵の表情を浮かべる。
「・・あぁぁぁ・・・・」
彼女は右足を一歩下げ、勢いをつけてから蹴り上げた。
目標はもちろん、男の股間に垂れ下がる睾丸だった。

パッシーンッ！！
トランクスの裾から、こぼれた形になっていた男の睾丸は逃げ場が無く彼女の足の甲と、自身の恥骨に挟まれて、睾丸は一瞬形を変えた。
「っあがぁぁぁっっ！！」
男がスローモーションのように、両膝をアリーナの黄色い砂の上に落とした。

黒目が半分上まぶたの中に隠れていた。両腕は、だらりとさげたまま、持ち上げる事すら出来ないようだ。顔は天井を仰ぎ、口の端からよだれが垂れている。
彼女は膝立ちの男にゆっくりと近づいた。
逞しい両腿の間には、こぼれたままの睾丸がある。
つま先で軽く小突くと、重そうに揺れる。
男は殆ど意識が無いようだが、うわ言の様に「・・・キンタマ・・・・キンタマ・・・」と呟いていた。
パチーン！
彼女はつま先で蹴り上げた。
睾丸が跳ね、男はビックンと痙攣する。
パチーン、パチーン、パチーン・・・・・・・・
彼女は連続して男の睾丸を蹴り続けた
蹴られるたびに男は痙攣し、喘ぎ続けた。
「あうっ、キンタマ・・はうっ、俺の・・・あひっ・・・キンタマ・・・ひぃっ・・・キンタマがぁ・・・はひっ・・・」
蹴りつかれた彼女が、ようやく蹴り地獄から男を解放すると、男は膝立ちのまま、顔面を砂の

中に突っ込む様にして倒れた。
身体の両脇に、投げ出された両腕が痙攣している。まるで土下座しているようだ。
彼女は、男の尻の方へまわった。大きな男の尻の下、股間には、彼女が散々痛めつけた、男の証が揺れている。
彼女は、もう一発蹴った。全身の力を込めて蹴り上げた。
大きく弧を描いて、彼女の足は男の睾丸に叩きつけられた。
地面に付いた男の顔面を支点にして、尻が浮き上がるほどの蹴りだった。
着地の衝撃で、男の足はのび、うつ伏せのまま、大の字になった。
口の周りの土は、男の吐き出した、胃液と唾液で濡れている。
睾丸は土の上に、鎮座していた。幸い、潰れてはいない様だった。
彼女は男の尻を右足で踏みつけ、拳を高々と上げた。
アリーナは震えんばかりの大歓声に包まれた。

約束どおり、彼女は自由の身になった。
アリーナが開設されて以来、初めての事だった。
この試合以降、兵士たちは、無敵ではなくなった。
女を犯すことよりも、自分の男を守ることを、考えなくてはならなくなった。

ともすれば、潰され、再起不能になる兵士も少なくなかった。
監視者である彼は、彼の兵士たちに、カップなどのプロテクターを、着けさせたかったが、新しい刺激を見つけた、選ばれし者達を説得することが出来なかった。
女を襲わせるだけの茶番は、男と女の命をかけた戦闘へと代わっていた。
女たちは己の命を、男たちは己の証をかけ、今日もアリーナに人が集まる。（